



国連・グローバル コミュニティ レクチュア・シリーズ 1

非西洋社会 における開発

永井道雄 編

企画発行



上智大学



国際連合大学



国際大学

発売

東京大学出版会

非西洋社会における開発

編者——永井道雄〔検印廃止〕

1984年3月31日発行 定価 1200 円

企画・発行——上智大学・国際連合大学・国際大学

発行所代表——国際連合大学

〒 150 東京都渋谷区渋谷 2 丁目 15 番地 1 号

発 売 所——財団法人 東京大学出版会

〒 113 東京都文京区本郷 7-3-1 東大構内

電話 03 (811) 8814・振替東京 6-59964

印刷・製本——株式会社三秀舎

©上智大学・国際連合大学・国際大学

国連・グローバル コミュニティ レクチュア・シリーズ Ⅰ

非西洋社会 における開発

永井道雄 編

企画発行 上智大学・国際連合大学・国際大学
発売 東京大学出版会

まえがき

永井道雄（国連大学学長特別顧問）

本書は、グローバル・コミュニティ講演シリーズの三回にわたるセミナーの第一回目、「非欧米世界における開発問題に関する会議」の議事録である。この会議は国際連合大学（UNU）、国際大学ならびに上智大学の共催により、一九八二年三月二日から三日まで東京のホテル・ニュー・オータニにおいて開かれた。会議には発展途上国、先進国双方から、近代化研究の分野において経験の深い専門家が出席し非欧米社会における近代化を指向した社会的・経済的・政治的發展の理論的枠組について討論した。すぐれた学者七氏が論文を発表し、傍聴者からの質問に答えた。傍聴者は学者——主として日本の学者、ただし日本人ばかりではない——や大学院生、ジャーナリスト、その他の関係者から成る。（注）

出席者のうち、ニュー・デリーの発展途上社会研究センターのラジニ・コタリ博士、カイロの第三世界フォーラムのイスマイル・サブリ・アブダッラ博士、東京のUNUのミゲル・ウルティア博士の三氏は、第三世界の学界におけるさまざまな見解を代表するものである。また北側先進国において行われた二つの主要な近代化研究プロジェクトの成果が発表された。一つは米国のプリンストン大学国

際問題研究センターが行った「近代化研究プロジェクト」である。同プロジェクトは、ソ連、中国、日本という非欧米三国の社会における近代化の経験を検証したもので、このプロジェクトの指導的立場にあった学者三氏、シリル・ブラック博士、マリウス・ジャンセン博士、ギルバート・ロズマン氏がこの会議に参加した。

もう一つの研究はUNU自体が、東京のアジア経済研究所と共同で行なった技術の移転・変容・開発に関する五カ年プロジェクトである。このプロジェクトのコーディネイターをつとめた林武博士が東京会議の第七番目の出席者として参加した。

国連大学は全世界にまたがる研究・公教育プロジェクト——総計約六〇件——のネットワークを主催しており、その運営を東京の本部で調整しているが、直接運営に当たるのは、それぞれ当該国の学者や教育機関や研究所である。これらのプロジェクトの背景として五つのテーマが設定されているが、個々の研究が二つ以上の領域にまたがる場合もある。

第一のテーマは平和と安全保障で、これは国際連合自体の創設の基盤となった人類の真剣な努力を反映するものである。発展途上世界においては武力紛争がますます広がり、先進国においては核兵器による世界絶滅の脅威が迫っている今日、国連各機関の具体的な措置によって社会的・経済的变化が促進され、紛争の根源を平和的に解消することが緊急の課題となっている。UNUはこの領域において特に重要な役割を負っている。それは世界の多様な文化的伝統の中で最良のもの、すなわち紛争の解決において知的正統性をもつ手段としての戦争と暴力を排除する伝統に基づいたコンセンサスの形成を図る役割である。

第二のテーマは、世界における不満をますます助長させているグローバルな経済の諸問題である。

先進諸国は自らの立場から見て継続的成長の制約になるとみなされるものを攻撃し、第三世界は国際経済制度が現存する不平等を再生産するような構造になっていると主張する。明らかに、この領域における対話には何らかの共通の基盤が必要とされる。北の工業諸国の経済力に対応して、発展に関する欧米の理念が優勢である現状をUNUは認識している。経済問題の討議に当たっては、これらの理念が通常、知的水準の枠組を成している。UNUとしては、経済的分水嶺の両側から知識人の視点を結集して、平等と相互理解の原理に基づいた対話を形成することによって、この不均衡を是正しようとするものである。

第三のテーマは、食糧問題とそれに関連した貧困の問題、非食糧資源の利用と保全、ならびに環境の質の問題である。各国間のさまざまな差異の中で、食に満ち足りた国と飢えたる国との間のますます広がりがつつあるギャップほど、際だった差異はない。世界人類の最低限度の栄養条件を満たすためには、西暦二〇〇〇年までに食糧生産を倍増しなければならない。農・工業生産を増大し、エネルギー需要を充足し、環境保全の要請に応じることとは、ある水準においては必然的に相いれないことになるが、これらの相互に競合する要請を合理化する国際的努力のために、知的基盤を築くことが重要である。

第四のテーマである人間と社会の開発は、文化的、社会・政治的に著しく多様な世界における諸民族の共存の問題と直接取り組むものである。国際的移住、失業、工業化にともなう方向感覚の喪失と疎外、婦人の役割の変化と家庭——これらはすべて全世界に共通の問題であり、国際的な展望をもつて取り組まなければならない。国際的関心の高い、このきわめて重要な領域は、UNUの研究・教育活動において大きな部分を占めている。

国連大学のプロジェクトの第五のテーマである科学技術は、国際協力の成否によって世界の最も差し迫った諸問題が最終的に解決できるか、それともその解決に失敗して大惨事を招くかという領域である。第三世界の挑戦は単に知識を人類の共通の財産とすることを要求しているだけではない。それはまた集権化と資本集約的開発に疑問を投げ掛けている。さらに北の先進諸国においても、同じような疑問がいくつか問われており、したがって、現時点では技術の流れは南向きの一方通行が大勢を占めるかもしれないが、その技術の利用と管理に関する展望の論議は、相互の尊敬と平等とに基づいた両方向のプロセスでなければならない。

これらのテーマ相互の間には当然のことながら重複と相互関連があるが、それはUNUのプロジェクトのそれぞれに反映されている。各プロジェクトはこれらのテーマに三つの異った方法で取り組む。第一の「開発研究」は具体的な問題の実証的検討を主体とする。第二の方法は「世界・地域規模の研究」と呼ばれていて、今回のグローバル・コミュニケーション講演シリーズはその一例である。それは開発の代替モデルを求めた幅広い探究である。第三のアプローチは「グローバルな学習」と題され、生涯学習の概念に基づいた草の根の教育プロジェクトをその内容とするものである。

東京に本部を置くUNUは日本とは特に密接な関係があり、この関係はきわめて価値の高い関係である。現代の世界は主として「欧米先進国」とその他の低開発国とに区分されることが多いが、日本は所詮この世界にあって特異な逆説的存在である。一方において、我々が開発と呼ぶ現象を測るのに用いる主要な指標——GNP、識字率、雇用構造、人口増加率、公衆衛生、あるいは否定的な側面では産業公害など——からすれば、日本は欧米諸国と肩を並べている。他方において、日本は非欧米社会であり、その文化的基盤を共にする相手は英国やフランスではなく、中国や朝鮮である。この事実

が示唆することの多くは本書に収めた論文に触れられているが、特記すべきことが一つある。それは日本の知的指向においては、東アジアの伝統の継続である側面が大きいという点である。東アジアの伝統とは、今日まで世界の思想を支配してきた欧米の学問と、輸入された欧米の知的様式やモデルに代るべきものを求めて、植民地化以前の自らのルーツを再発見せざるを得なくなった第三世界の学問との中間に位置するものである。

これらの多様な知的伝統は互いに対立するものであってはならない。科学と学問はきびしい知的挑戦の雰囲気の中においてのみ栄えることができるものであり、欧米の学問的伝統としてその例外ではない。非欧米的思考が欧米の学問、特に第三世界に関する学問の概念的枠組に対して有効な挑戦を突きつけられる限りにおいて、その結果は学問の世界全体にとって専ら利益をもたらすことになるのである。日本の知的経験が新興諸国の学者によってどの程度まで活用されるかは、これからの推移を見る他ない。

明らかに、過去一世紀間、日本と他の非欧米諸国が異なった道をたどってきたことにより、両者の間には幅広い溝が横たわっている。日本の近隣諸国でさえ、近代以前における関係に比べれば、さまざまな形で日本とは知的にかけ離れた状況にある。そのため、どのような意味においても、これら諸国の目に、日本が「自動的」に自然なモデルとして映るということはない。むしろ、何か学ぶべき教訓があるとすれば、それは意識的に求められ、意識的に教えられるべきものであって、このプロセスは日本と他の非欧米社会にとって自然なものでなければならぬ。ここにUNUが決定的な役割を演じ得る領域がある。UNUの任務の一つは、長い間日本の学者を他国、特に発展途上諸国の同僚たちから隔ててきた扉を開くことにある。この任務の遂行において我々が直面する困難の一つは、文化的

つながり——学問的つながりを含む——が伝統的な欧米文化の中心の結節点で交わっているという事実にある。我々が今日非欧米の知識人たちの間に直接の結びつきを築こうとする時でさえ、日本語あるいは広く理解されている第三世界の言語ではなく、英語を媒介として使用せざるを得ない。この選択は特殊な問題を生じさせるものではあるが、英語は依然として、プリンストンの研究も含め、きわめて多様な研究資料や学問的資源の利用を可能にする媒体となっている。

日本を含む非欧米三国を対象としたプリンストン・プロジェクトにより、欧米における研究の一つの主要な流れを紹介することが可能となった。さらにこの研究は「没価値的」な立場を取っている、すなわち、政治的あるいは文化的に偏った世界観でなく、立証可能な、実証的研究の成果に基づいている。林博士の研究は、日本自体の経験に基づいてはいるが、発展途上諸国のニーズをも充分に考慮した、近代化に関する日本人の視点を示すものである。最後に、第三世界から参加した学者諸氏は、世界の諸条件に関する幅広い理解に裏づけられ、自国社会の現実に深く根ざした鋭い洞察をもって問題を分析する。

すべての研究発表に共通の一つの特色、近代化に関する我々の展望を統一するのに役立つと思われる特色は、いずれも発展を客観的に評価する共通の基準を求めているという点である。提起されたすべての問題点について必ずしも完全な一致が見られたわけではないが、「同じことばを語ろう」とし、異文化間に共通の参照の枠組を設定しようとする真剣な努力があった。プリンストン・プロジェクトが近代化の任務を遂行することのできるエリート育成の重要性を強調したのに対し、第三世界出身の講師数氏は、急速な近代化の追求において草の根レベルの大衆組織が参加すべきことを力説した。これは一見互いに矛盾するようであるが、いずれのアプローチも、発展における人間的要因の重要性を

重視する点で共通している。これは恐らく日本のモデルに注目する研究にあつては必然的なことであろう。なぜならば、日本は天然資源の乏しさを、その国民の人間の潜在能力を集約的、しかも巧みに活用することにより補つて、高度の発展を達成した国だからである。正に今回の講演で説かれた発展へのアプローチすべてが、人間的要素に対する信念を共有している。例えば、アラブの学者が、石油はアラブの人的資源の全面的開発を妨げる恐れがあるので、アラブ民族にとってはむしろ不幸の根源であるとしたことに、読者は驚かれるかもしれない。当然のことながら、この講演シリーズは、近代化のための理論的写真真を描き上げようとするものではない。UNUの目的は、近代化の諸問題ならびにその目標について、国際的コンセンサスの成立を促進することにある。今回の講演シリーズは、複数の文化圏出身の学者を集め、各民族のイデオロギー、文化的偏見にとらわれない自由な論議を交わしてもらった。このセミナーにおいて発表された見解がこの主題に関する今後の国際的交流の基盤として役立つとすれば、本シリーズはその目的を達したということになる。

(注) グローバル・コミュニティ講演シリーズは国際連合大学が国際大学ならびに上智大学と共催した三つのセミナーから成る。その目的は、発展途上国ならびに先進国が直面している世界平和ならびに社会・経済発展の緊急な諸問題に関する対話を促進することにある。第二のセミナー、「平和、安全保障、軍縮に関する会議」は、東京の上智大学において一九八二年一〇月二六日から二八日まで三日間にわたって開催された。本シリーズの最後のセミナー、「経済発展と管理の様式」は、一九八三年一月一七日から二一日までUNUにおいて開催された。

非西洋社会における開発 [目次]

まえがき——永井道雄 3

歓迎の挨拶——スジャトモコ 15

学際的な催しに際して——柳瀬睦男 20

I 第三世界における近代化

(1) アジアにおける開発戦略と自由の問題 ラジニ・コタリ 25

(2) アラブ世界における開発戦略 イスマイル・サブリ・アブダッラ 48

(3) ラテン・アメリカにおける開発戦略 ミゲル・ウルティア 66

(4) パネル討論 86

II 日本の近代化が教える教訓

- (5) 技術の移転・変容・開発——日本の経験 林 武 139

III 中国・日本・ソ連における近代化

〔一部〕近代化論序説

- (6) 近代化研究序説 シリル・ブラック 177

- (7) 近代化研究における時代区分 シリル・ブラック 185

- (8) プリンストン・プロジェクトの沿革 ギルバード・ロズマン 189

- (9) 近代化研究の学問的ルーツ マリウス・ジャンセン 196

〔三部〕近代化の前提条件

- (10) ロシア——近代化の前提 シリル・ブラック 203

- (11) 日本——近代化の前提 マリウス・ジャンセン 213

(12) 中国——近代化の前提 ギルバート・ロズマン 222

〔三部〕変革期

(13) ロシアの変革期 シリル・ブラック 231

(14) 日本の変革期 マリウス・ジャンセン 242

(15) 中国の変革期 ギルバート・ロズマン 256

〔四部〕近代化とグローバル・コミュニティ

(16) 共産主義と近代化 ギルバート・ロズマン 269

(17) モデルとしての日本 マリウス・ジャンセン 277

(18) 高度近代化 シリル・ブラック 281

〔五部〕パネル討論

(19) 方法論 293

(20) 近代のモデル 310

(21) 中国と日本 317

(22) 民主主義対中央集権主義 325

(23) 近代化とグローバル・コミュニティ 331

結び 343

歓迎の挨拶

スジャトモコ（国連大学学長）

国連大学は、人類、世界について、その多様性を尊重しながら、如何にして一つの単位として考えるかという問題に挑戦してきました。前を見る最もよい方法は、後を振り返って、未来に向かって進む上で知らなければならぬ教訓を歴史から学ぶことだと思います。歴史とは、いうまでもなく、過去との継続的対話です。我々が歴史を完全に解釈しつくすということはありません。各世代が、未来に向かって進む過程で、過去の持つ意義を新たに判断しなければなりません。過去について認める意義の中から、各世代は、未知の未来の不透明さを見透す上での指針をいくつか見出すかもしれません。世界が完全な相互依存の時代に入ろうとしている現在、グローバル・コミュニティーという文脈において、人間としての我々自身を考える新しい見方を発展させる必要性がかつてなく高まっています。我々自身の国を含む、いくつかの国の発展の経験を振り返って、我々が教えられ、自国の発展に役立ててきた開発理論を、我々が観察した現実と対照して、その有効性を検証することの重要性は、正にここにあるのです。

開発理論と現実との間に大きな隔たりがあるということ、そして我々の開発理論が如何に不十分な